

CONTENTS

02 特集

甲南初が続々と! 前進するSPIRITS

- 03 ベナン共和国出身アフリカ人留学生
ミガン・アントニーさん
- 05 理系女子特別推薦入試入学者
川上 小春さん
- 07 スポーツ推薦入試【自由枠】入学者(競技種目:テコンドー)
中濱 優佳さん
- 09 全日本学生音楽コンクール大阪大会 声楽部門高校の部1位入賞
福留 颯一さん

- 11 さまざまな分野の第一線で活躍する卒業生
It's KONAN Style
墨絵師 井上 慶美さん

13 高中TOPICS

- HEART GLOBAL
第1回ソフィア講演会
葉田 順治氏よりトレーニング機器を寄贈されました

15 なるほど! 甲南アカデミア

- 理工学部 物理学 准教授 田中 孝明
X線・ガンマ線天文学の最前線

- 理工学部 物理学 教授 秋宗 秀俊
<NEWS>2027年、天体観測室が誕生

18 新任退任教職員紹介

19 KONAN TOPICS

21 就活最前線

- 甲南大生の就活事情と
オール甲南ネットワークによるサポート体制

25 甲南解体新書 #07

- 変わりゆく学舎

27 岡本ぶらり 第17回

- あのもろも現在も、甲南大生は岡本で Part2

29 KONAN FORUM

- 課外活動成果報告 /
新刊一覧 ほか

裏表紙 Nanbo Today

表紙の1枚
わたせせいぞろいが描く「甲南」の日常
THEME「甲南学園」
～「甲南の伝統」を紡ぐ～



甲南大学初
スポーツ推薦入試【自由枠】
テコンドー競技入学者



甲南大学初
アフリカ人留学生

甲南初が続々と! 前進する SPIRITS

「個性を尊重し、各人の天賦の特性を伸張させる」。創立者・平生飢三郎が掲げた教育理念のもと、探究心や向上心を胸に抱き、未来へ突き進んでいく学生たち。「甲南初」を冠し、キャンパスに新たな風を起こす4人のスピリッツに注目です。



甲南高等学校初
全日本学生音楽コンクール
大阪大会 声楽部門
1位入賞者



甲南大学初
「リケジョ入試」
入学者



甲南大学
初

ベナン共和国出身アフリカ人留学生

ミガン・アントニーさん

自然科学研究科 知能情報学専攻 博士後期課程 1年次

母国の農業を助きたい トウモロコシ収穫ロボットを研究中

西アフリカのベナン共和国から、最先端のロボット技術を学ぶため、はるばる海を越えてやってきたミガン・アントニーさん。甲南大学初のアフリカ人留学生であるミガンさんに、日本を選んだ理由や日本とベナンとの違い、大学院で取り組んでいる研究などについてお聞きました。



日本語学校で仲間とともに。この学校は日本でも活躍したベナン出身のタレント、ゾマホン氏が設立した。

産業ロボット分野が熱い 日本への留学を決意

高校生のころ、将来はどんな仕事に就くべきかいろいろ悩み考えた末、これからの時代に必要となるロボット技術を学ぼうと思いました。当時、影響を受けたのが脳神経外科手術の支援ロボット「ROSA®」を開発したベルタン・ナフム氏です。医療用ロボット工学の分野で活躍する起業家で、ほかにも肝臓がんの治療に対する革新的な技術などを開発しています。フランスで活躍するナフム氏のルーツがベナンにあることにも触発され、私もロボット技術で人々の暮らしに役立つものを作りたい、と強く思いました。

しかし、ベナンにはロボット工学を専門に学べる大学がありません。当初は仏語か英語圏への留学を考えましたが、自費で行けるわけもなく、国費留学はハードルが高くてかきませんでした。高校卒業後は国立アボメカラビ大学へ進学し、電気・電子工学を学びましたが、機会があれば留学したいとずっと考えていました。

世界のロボット技術については、常に情報収集していましたが、あるとき産業用ロボットの世界市場において、その約6割を日本製ロボットが占めていると知り、注目するようになりました。本田技研工業(株)のヒューマノイドロボット「ASIMO」や、サイバーダイン(株)の世界初の装着型サイボーグ「HAL」の動画を見て、大学で学んでいる制御技術がこれらのロボットの「動き」にどのように使われているのか、とても興味をもちました。そこで日本に留学したいと考え、日本大使館に問い合わせしてみると、

ロスが出てくるので、人の手によって収穫されています。熟したトウモロコシを選別・収穫できるロボットの開発は、農家の負担を軽減することにも、ベナンの農業生産性の向上に貢献できると考えました。

この研究テーマで、2023年に神戸市主催の「アフリカ開発を加速させるビジネスアイデアコンテスト」で学生賞を受賞し、2024年にも大手農機具メーカー主催の「第35回ヤンマー学生懸賞論文」で優秀賞を受賞しました。実際に研究を進めていくと、神戸情報大学

院大学での2年間では全然足りませんでした。引き続き研究を続けられる環境を探したところ、当時在学学生ではないにもかかわらず、入部させてもらっていた合気道部のある甲南大学に、ロボティクス研究室があると聞き、見学に行きました。ここなら続けて研究ができると思い、数か月間の研究生を経て、大学院入試に合格。2025年4月からは大学院生として岡本キャンパスに通っています。

研究の一環で、畑を借りてトウモロコシを育てています。植え付けから収穫までの工程を理解するため、実際に作業を体験し、収穫ロボットに必要な機能の検証に役立てています。

ロボットが自動でトウモロコシひとつの収穫タイミングを判断するために、AIの画像認識機能を使用します。ロボットに収穫させる「熟したトウモロコシ」をあらかじめ学習させるため、大量の画像データが必要です。借りている畑の収穫時期には、AIの学習用にできる限りたくさんの「熟したトウモロコシ」を撮影に行きます。普通ならチームで行うような研究をすべて一人でやっているため、やることが多く大変です。



学費が無料の日本語学校を紹介してもらえました。大学の学びと並行しながら、日本語学校でも5年間、日本語をしっかり勉強しました。

2022年秋、来日 念願のロボット研究をスタート

大学を卒業後、一度は就職しましたが、JICA(国際協力機構)の奨学金プログラムの選考に合格し、晴れて日本へ留学できることになりました。2022年10月、JICAの紹介で神戸情報大学院大学に入学。念願だったロボット技術を学び始めました。研究するテーマは「トウモロコシを自動で収穫する農業用ロボットの研究開発」に決めました。

トウモロコシはベナンの主食であり、最も生産されている穀物です。ただし、作っているのは家族経営の小規模な農家が多く、広大な畑地を少人数で管理・作業しています。トラクターなど農機による収穫は、どうしてもキズがついて

社会起業家も視野に入れ ロボットの実用化をめざす

平日のほとんどは甲南大学のロボティクス研究室で、朝から夕方まで研究に関する作業をしています。研究のための装置やロボットがそろっている環境、指導教員のサポートがあることを、とてもありがたく思っています。ベナンで電気・電子工学を学んでいたころは、実験に必要な器具が大学に無いことが多く、自分のお金でそろえる必要がありました。

ベナンと日本の違いはたくさんありますが、日本では大学生の就職活動のスタート時期がとて早くて驚いています。ベナンの大学は運営体制がしっかり整っていないため、卒業日でさえ明確に決まっていなかった。なので、就職活動は卒業してから始めるのが普通で、そもそもベナンには企業数が少ないため、人脈を生かして入社するケースが多いです。

海外へ留学して高度な専門知識や技術を身につけても、それを生かせる企業や環境がベナンにはほとんどありません。そのため留学後はそのまま海外に居住する人も多く、優秀な人材が流出してしまうことが母国の課題だと感じています。

現在の研究が完成し、実際にロボットを製造するには、ロボット関連の企業に就職するか、もしくは社会起業家として自分でやっていく道もあります。いずれにしてもトウモロコシ収穫ロボットを実用化して、母国の農業に役立てたい。ベナンはもちろん、ほかにも必要とするさまざまな国へ向けて、広く展開することが目標です。



キャンプ場に広がる星空をスマホで撮影中。

2年次には長野県での天体観測合宿も予定されています。中学生のころ、キャンプに行って家族でながめた星空を、次は同じ学科の友人たちと望遠鏡を使って観測できるのかと思うと、とても待ち遠しいです。2027年に完成する新しい理系棟には甲南大学初の天体観測室ができるそうなので、宇宙好きな私にとっては、うれしいことづくしです。



高校でも物理を選択している女子は少なかったのですが、大学入学後も物理学科に女子がどれくらいいるのか気になっていました。そんな中、入試のときに甲南大学の先生から「世界的に見れば、女性の科学研究者が少ないというわけではない」と教えていただき安心したので覚えています。日本でも理系分野について大学で学び、理系の職業をめざす女子が増えてきています。現在、私が在籍する物理学科の1年次は42人中、女子が6人と、本学の理工学部の中では女子の人数は少ないほうですが、先生方が気にかけて、よく声をかけてくださっていると感じています。おかげで学生生活は楽しく、充実した日々を送っています。4年間で得た知識と体験を基に、将来は宇宙や物理現象について、たくさんの人にわかりやすく伝え、宇宙の魅力を広めることができる学芸員をめざしています。そして、それによって、「科学者や技術者になりたい」と思ってくれる人材を少しでも増やすことができればうれしいです。

専門とする学芸員になりたいと思うようになりました。

理工学部物理学科入学をめざし 新しい入試制度にトライ

甲南大学を選んだ大きな理由は、理工学の分野が充実しており、2026年度には現在の物理学科が宇宙物理学・量子物理学科に改組されることもあり、数ある大学の中でも本格的に天文学と宇宙物理学を学べる環境があるからでした。

また、私が受験するタイミングで、これらの時代における理系の女性研究者などを育成するために、女子特別推薦型という公募制推薦入試制度ができることを知り、ぜひその入試制度にトライしたいと考えるようになりました。

オープンキャンパスに参加した際には、学生と教員の距離が近いことが、理系のある他大学と比べてもより強く感じられ、このように先生方が親身に指導してくださる環境で

あれば、実験や観測などもグループワークで楽しく行えるだろうと思い、ますます甲南大学の物理学科で学びたくなりました。

学芸員をめざして 実験と観測に励む日々

学芸員という職業は、自分が考えた企画などをプレゼンテーションする能力や、人に伝える力・聞く力が必要とされます。これから大学でさまざまな実験結果の報告会や、学生同士や教員と議論を深めながら行う授業で、学芸員に必要とされる能力の土台を作っていきたいと思っています。

今は、これから宇宙の成り立ちや量子力学を学ぶうえで必要な物理学の知識を、高校で学ぶ内容からより深く学んでいます。その中でも、遠心力など物理学の基本法則を実験で再現・観測する授業が面白いです。大学の授業は、高校の物理に比べると段違いにむずかしいのですが、講義や実験を通してそれらを理解できたときに、学ぶことの楽しさを感じています。星や銀河の形成など、宇宙の理論的な成り立ちについて、さらに深く研究していきたいです。

宇宙を解き明かしながら、 私は未来へ歩いていく

理工系の女性研究者や技術者を育成することを目的とした、公募制推薦入学試験〔女子特別推薦型〕が甲南大学の2025年度入試で初めて実施されました。川上小春さんは、理工学部物理学科に合格をはたしました。中学生のころから宇宙の仕組みに心を躍らせていたという根柢からの「リケジョ」である川上さんに、これまでの軌跡とこれからの夢を語ってもらいました。

小さいころから 自然の不思議を知りたくて

小さいころから、海の波はなぜ起こるのか、虹はなぜ七色なのかなど、さまざまな自然現象にいつも興味をもっていました。家族でよく行っていたキャンプで、普段は見ることのできないような星空を見ながら、それぞれの星は地球から遠く離れていて、その先はどうなっているのかなど、宇宙の仕組みや誕生といった未知の事柄について想像する楽しさを覚えたことが、理系分野に興味をもった大きなきっかけです。中学生のときには、理科の実験で、ものごとの背景にある物理現象について学ぶことに夢中になっていました。

高校では物理が大好きで、卒業研究では天の川について、本やインターネットを使って調べました。また、家族と科学館へ行った際に学芸員の方のお話がとても面白く、さらに、多くの人に物理学など科学の楽しさを伝える企画を立案することが学芸員の重要な仕事の一つだと知り、将来はぜひ物理学を

宇宙や物理の面白さを 一人でも多くの人に伝えたい



高校3年生で手にしたジュニアオリンピック(第17回全日本ジュニアテコンドー選手権大会)の金メダルと、2024年リンクステコンドーフェスティバルの銀メダル。

絶対に負けられない
試合を制して

そんな中で鍛錬を続けていると、いくつかの大会で上位入賞するようになり、高校3年生ではジュニアオリンピックで優勝することができました。高校生以下のジュニア階級では最後となる大会でトップに立てたこと。また、決勝戦の相手が、過去に試合で何度か顔を合わせたことのある仲の良い子で、お互いに敬意を払いつつも「絶対負けられない」とも思っていたので、喜びもひとしおでした。さらに、大学入学後すぐの5月に行われた全日本テコンドー選手権大会では、西日本地区の1位になることができました。

甲南大学を選んだのは、テコンドーの練習に通うスポーツクラブとキャンパスが近いことも理由の一つです。通学にはトレーニングのために自転車を使い、クラブと岡本キャンパスまでの20分ほどを毎日往復しています。文学部歴史文化学科で学ぼうと決めたのは、小さいころから妖怪が好きで、民俗学の書物に興味があったからです。オープンキャンパスで歴史文化学科専用の図書室を見た際に、蔵書の充実ぶりに圧倒され、ここで学びたいと強く思いました。

スポーツ推薦「自由枠」が
人生の可能性を広げた

甲南大学にはテコンドーのクラブはないので、スポーツ推薦入試は出願できないと思っていたのですが、学外での競技活動でも数年前に

甲南大学 初
スポーツ推薦入試「自由枠」入学者
(競技種目：テコンドー)

なかはま ゆうか
中濱 優佳さん

文学部 歴史文化学科 1年次



体力と気力の淵で闘う
勝ち抜きたい私が、いる

創設された「自由枠」なら出願できることがわかり、コーチと手を取り合って喜んだことを覚えています。あとで聞くと、「自由枠」にテコンドーで出願したのは自分が初めてと知りました。



テコンドーは体重による階級があるため、激しい減量を行うこともあります。私は身長165cmなのですが、46kg級の中では日本国内なら背が高いほうなので、その階級で試合できるのは、蹴りのリーチ差などからいってもかなり有利です。体重超過は厳禁なので減量によって体重をギリギリまで落として闘うと、3ラウンド目まで試合が続いたときは立っているのがやっとになります。また、減量では水抜きが特につらく、喉が乾いて夜も寝られなくなることがあります。体力と気力がギリギリの勝負になってきますが、私は、気合と根性で他の人と僅差をつけて、ここまでこれたのかなと思います。減量のための食事制限には、家族にもかなり協力してもらっているので、とても感謝しています。

甲南大学では、スポーツの資質と能力を有する学生を迎えるため、スポーツ能力に優れた者の推薦入学試験を実施しています。中濱優佳さんは、初のテコンドー競技での入学者。高校3年生でJOCジュニアオリンピックカップ第17回全日本ジュニアテコンドー選手権大会で優勝し、大学入学後も2025年5月の全日本テコンドー選手権大会で西日本1位に輝いています。競技にかける情熱と学生生活について語っていただきました。

中学生から、男子にまざって
「闘う女子」だった

中学生のときには、柔道部に入って男子にまざって練習をしていました。そのまま楽しく続けられればよかったのですが、そのあとすぐにコロナ禍に見舞われて、部活が中止に。運動ができなくてフラストレーションがたまっていたときに、たまたま立ち寄ったスポーツクラブで出会ったのがテコンドーという競技でした。

体験してみると、「蹴り」を主体とした格闘技で、攻守の入れ替わりの激しさが面白く、技が決まったときにはそれまで経験したことのない気持ちよさがあって、そのまま続けることにしました。あとから知ったのですが、そのスクール生のほとんどが幼少期から始めたという強者ぞろいで、中高生は全国大会で常に上位入賞の名門スクールでした。それがわかったときは、今から始めてみんなについていけるかと焦りましたね。

甲南大学の代表という気持ちで
2025年秋の闘いに臨む

2025年秋には、大学生だけで行われる全日本学生テコンドー選手権大会に初めて出場します。甲南大学のテコンドー部としてはないですが、甲南大学の代表という気持ちで闘いたいと思います。なんとしても、上位入賞をしたいと思い、練習に汗を流す日々です。テコンドーを通じて、目標をしっかりと定めて行動力をつけることの大切さを学びました。そして、結果を出すことが、次への自信につながることも知りました。また、今ある自分を支えてくれている家族や関係者の方々への感謝を忘れてはならないことにも改めて気づかされました。それらを、今後の学生生活や社会に出るからの人生の指標にしていきたいと思っています。



コンクール前の食事は唐揚げ。揚げ物の油分が喉のうらおいにいいらしい。



小学5年生で歌の楽しさを知り、高校2年生から声楽を本格的に学び始める

小さいころから音楽に合わせて踊るのが好きで、ダンスやバレエを習っていました。同じ教室には男子が少なく、そのまま続けるかどうか迷っていました。そんなとき、友人から歌の教室に誘われ、ミュージカルの歌の発表会を観に行ったのが、歌との出会いです。「歌ってすごい」と感動し、自分には無理かもしれないと思いながら体験レッスンを受けた。先生には「3年続けて素質がなければ、はつきり伝えます」と言われ、「まずは3年間、やってみよう」と、歌のレッスンを始めました。

レッスンは楽しく、中学3年生で初めてコンクールに挑戦。初舞台は緊張でお腹が痛くなり、リハーサルでは歌詞を間違えました。が、本番はなんとか歌い切りました。予選・本選を経験し、少しずつ舞台上に慣れたことで、入賞することができました。そのコンクールで「ミュージカル俳優をめざすなら声楽を学ばう」と審査員の方に助言をいただきました。調べてみると、憧れている俳優の方々には声楽を学んだ人が多くいました。「自分も歌を極めたい」と思い、本格的に声楽を学ぼうと決めました。

学び始めると楽譜に込められた作曲者の思いや意図を意識するようになり、ただ「歌う」だけのころとは違う自分を感じています。音楽の奥深さに触れ、もっと表現力を高めたいと思い、毎日発声練習や課題曲を練習します。イタリア語の歌曲にも挑戦し、発音や意味を調べながら丁寧に歌い込んでいます。併せてソルフェージュやピアノも学びます。声楽でも、



コンクールのワンシーン。

ミュージカル同様に成長したくて、高校2年生で全日本学生音楽コンクールに挑戦しました。

全日本学生音楽コンクール大阪大会
声楽部門初出場で1位に入賞

声楽を始めてまだ日が浅かったため、正直、自信はありませんでした。毎日の練習を信じて、「いつものように楽しんで歌おう」と精一杯の気持ちでステージに立ちました。なので大阪大会で1位になったときは「何かの間違いでは？」と驚きましたが、本当にうれしかったです。声楽だけではなく、これまでの積み重ねすべてが評価されたような気持ちでした。

全国大会に進むと、大阪大会以上にレベルの高い方々ばかりで、リハーサルの空気もまったく違いました。観客も多く、最初は緊張しましたが、練習を信じて楽しく歌えました。力を出し切ったので、後悔はありません。それよりも全国の出場者の歌声を聴き、自分にはまだまだ足りないことがたくさんあると気づけたことは貴重な経験だったと思います。

「もっと声量をつけたい」「イタリア語の発音や意味をもっと丁寧に表現したい」と、今は課題の克服にも取り組んでいます。今年も全日本学生音楽コンクールに挑戦し、全国大会で1位を取ることが目標です。日々練習を重ね、今以上に表現力を高めていきたいです。

多くの人の心に届くように、
歌に磨きをかけていきたい

歌という表現を通じて、「自分らしさ」を出せる。歌っているときが一番自分らしくいられる時間のような気がします。そして、歌で心が伝わる喜びは格別です。ある日、ダンス教室で「二本のバラ」を歌ったとき、先生の涙を見て「歌が心に届いた」と実感しました。まだ声楽の入り口に立ったばかりですが、もっと学んで自分らしい歌を届けていきたいです。

中学校への進学の際に、歌とダンスと勉強を両立できる学校を探していて、甲南中学校を知りました。校長先生のお話を聞き「ここで両方がんばりたい」と思いました。甲南では、先生や友人にも恵まれています。先生は「次はどんな挑戦をするの？」と声をかけてくださり、ガラコンサートには校長先生が来てくださいました。活動を応援してもらえる甲南に通えていることが、とてもありがたく、「もっとがんばろう」と思えます。家族もずっと支えてくれていて、家で歌えば間違えもすぐ気づかれるほど、いつも聴いてくれます。感謝の気持ちをお忘れず、もっと成長して夢をかなえたいです。

歌とダンスで心を動かしたい —— 夢はミュージカル俳優

1947年から続く、歴史ある音楽コンクールの大阪大会において、甲南高等学校初の声楽部門1位入賞を果たし、全国大会に出場した福留颯一さん。歌を始めたきっかけやコンクールのこと、将来の夢についてお話を聞きました。



甲南高等学校 初
全日本学生音楽コンクール大阪大会
声楽部門 高校の部 1位入賞

ふくどめ はやと
福留颯一さん

甲南高等学校 三年生